無法のガジェット

彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無法のガジェット

【Ｎコード】
Ｎ８８９８Ｚ

【作者名】
彼方

【あらすじ】
神を殺す力。
神に並ぶ力。
各地の神殿などで確認された『神の痕跡』をたどることで、その境地に辿り着くことが出来るとの仮説が立てられてから、各国は競い合うように求め合った。
そんな中、レイル・クラムルージュは『神の痕跡』の片鱗に触れてしまい……。

『神の痕跡』　1（前書き）

はじめまして。
大好物は猫です。まあ勿論食べるわけではないですけれどね。
しかし字面的に『大好きな物』なのに一般的に連想されるのが食べ物のこととというのは、やっぱり人間は本質的に食べ物のことしか考えてないってことなんですかね？
作者は昨日の夕飯のメニューとかすぐ失念しますけれど……。
どうでもいい話はここらへんで。
駄文ばかりです。期待はしないでください。言ってしまえば時間の無駄です。それでも良かったら楽しんでいってください。

『神の痕跡』　1

騎士団に入団して三年目、レイルはとある神殿に派遣されていた。

『神の痕跡』の調査だ。例年に比べ、今年は『神の痕跡』についての情報が多い。そのひとつに、レイルのいる神殿、カリバローズ神殿があったのだ。

カリバローズ神殿は世界各地に星の数ほどある神殿の中でも、きわめて実用的だったらしい。とはいっても、すべては古い文献内での出来事だ。カリバローズ神殿を見た何者かが勝手に創造した物語かもしれないし、本当にあった話かもしれない。それはすでに過ぎたことだ。もう確認するすべはない。今重要なのは、ここで発見された『神の痕跡』に尽きるのだ。

レイルは無意識のうちに腰の剣に手を触れていた。身体が戦闘を欲しているのかもしれない。先月の騒動から、この任務を受けるまで、レイルは干されていた。剣を握る機会なんて皆無で、常に古い文献や上からの指令書、住民からの情報などの資料に目を通すだけの日々が続いていて、正直どころか、あからさまにレイルはあきれていた。こんなことをするために騎士団に入ったわけではない。自分の目的に近づくことのない仕事に、いつもため息ばかりをもらしていた。

そんなレイルにも、やっとのことで回ってきた仕事がこれだったのだ。帯刀は認められたものの、正直戦闘の様子は毛ほどもない。当然といえば当然だ。ここは古びた神殿で、盗掘するようなものは

何一つない。昔は需要があったものは案外すぐに廃り、そして忘れられるのが常だ。そんなところを根城にする盗賊集団など、高が知れてしまう。

あまり乗り気ではないのだが、これも仕事なのだと自分に言い聞かせ、レイルは神殿を奥へと進んでいく。中はじめじめしていると予想していたのだが、実際は乾燥していた。見れば、天井が日の光を集めやすいよう、開けたつくりになっている。その影響か、とレイルは適当に考え、足を前へと進めていく。

カリバローズ神殿での『神の痕跡』についての目撃情報はきわめて曖昧だった。この世界に現れる神の力はごく片鱗だといわれいているが、それでも強大な力ではある。そして『神の痕跡』には必ずとある石盤が現れるのだ。われわれの使う言語ではない、文字とも絵ともつかないような異様なものが整然とならべられたそれこそ、人間が神に近づける唯一の可能性だといわれている。が、正直レイルにはどうでもいいことだった。

「そうだ。俺はコイツさえ振り回せればどうだっていい」

レイルは腰に取り付けられた、ミドルタイプの機甲剣（アーマーブレード）の柄を強く握り締めた。

騎士団に入った理由だってそうだ。騎士団に入れば、正当な理由で、強敵と合間見ることができる。盗賊ギルドや傭兵はそうは行かない。確かに自由が利くかもしれないが、国家の目におびえながら行動するのはわずらわしい。タダそれだけの理由で、レイルは騎士団にトップの成績で入団したのだ。平民出のレイルをよく思わない貴族どもは一人残らず力でねじ伏せてきた。それはこれからも同じだ。上に行けば上に行くほど、特権が与えられる。そうすればさら

に強い敵と剣を交えることができる。それさえできれば何の問題もない。

気づいたときには、神殿の最深部まで足を運んでいた。中央には祭壇があるが、もう何年も使われていないのだろう、所々に亀裂が入っている。本来なら神聖な水晶でも置いてなにやらを祀ったりするのだろうが、今ではタダの石で作った飾りだ。

辺りを見回してみる。祭壇と同じように亀裂の入った灰色の内装があるだけで、特に変わったものはない。『神の痕跡』たる石盤の姿は見当たらなかった。

（デマ、か……？）

その言葉が頭をよぎったとき、ジャリ、と土を噛む音が神殿内に反響した。

レイルは考えるより先に腰から機甲剣（アーマーブレード）を取り外すと同時に振り返り、音のした方向に切っ先を向けた。そこにいたのは一人の少女だった。

「わ、わわわっ！」

顔の前で手を振る少女は二歩、三歩と後ずさりしている。レイルたちのいる最深部には三本の通路でつながっていた。そのうちレイルとは違う通路を使ってここまで少女は来たのだろう。

碧眼の少女だった。ブロンドの髪を肩の位置で切り揃えている。タンクトップにショートパンツと、簡単な服装をしていた。腰にはホルダーで三本のダガーが取り付けられている。

レイルは切っ先を少女に向け、鋭く言い放った。

「なんだテメェは。なんでここにいんだよ?」

「え、えっと。そのですね、あのー」

誰かに会うなど予想もしていなかったのか、相当混乱した様子の少女はなんとか言葉を思い浮かべているかのように矢継ぎ早に喋った。

「散歩、です。そう、散歩だ！　散歩なんですよー」

えへへ、と笑う少女の顔はなんだかぎこちがない。レイルは貫くような鋭い瞳で少女を睨みながら、

「ふざけてんのか？　散歩でこんなとこ来るやつがいるわけねぇだろうが。それにここは『神の痕跡』の調査で封鎖の指令が各所に回っていたはずだ。それを知らねぇわけはねぇし、知っていて入ってきてんなら騎士団として見逃すわけにはいかねぇ」

「騎士団?」

きょとん、とした顔で少女は小首をかしげた。

「騎士団?　あなたが?」

「あん?」

「あははは。それはありえないですよー。どこからどうみたって

タダのゴロツキじゃないですかー。百歩譲っても騎士には見えませんよ」

少女は声を上げて笑い始めた。レイルの頬がヒクヒクと痙攣する。

「テ、メェ。斬られてェのか？」

レイルはこれ見よがしに機甲剣（アーマーブレード）を少女に見せつけた。それで少女の笑いは止まったが、まだレイルが騎士ということは信じていないようだ。その証拠に、さっきのレイルの騎士発言がギャグだったとでも思ったのか、妙になれなれしく話しかけてきた。

「名前はなんて言うんですかー？」

レイルは眉間に皺を寄せる。

「私はサーシャっていいます。サーシャ・ラリオン。あなたは？」

「俺はレイル・クラムルージュだ」

名乗ってすぐにレイルは後悔した。騎士団は罪人を相手に剣を振るうときや決闘のときなど、名を名乗る掟があるのだ。その癖が出てしまった。それがサーシャの馴れ馴れしさに拍車をかけてしまった。

「レイルさん、ですかぁ。レイルさんはどこの出身なんです？私はクーリムランドなんですよー」

「なんで俺がそんなこと答えなくちゃならねぇんだよ」

「えー、教えてくれてもいいじゃないですかぁ。それともド田舎だから離すのが嫌なんですか？」

いい加減レイルは頭にきていた。サーシャの馴れ馴れしさといったら、同僚のリノアの図々しさにも匹敵するほどのものだ。しかもレイルの故郷はデルムアとい片田舎だ。商業都市として名高いクーリムランドの八分の一以下の土地に、十分の一程度の人口だ。もし自分の出身地を口にしたら、また笑われるに決まっている。

「もう一度聞く。なんでテメェはここにいんだよ？」

「テメェじゃないです。サーシャですよぉ」

顔を膨らませ、ふてくされるサーシャを本気で切り伏せてやろうかと考えた直後、足場が大きく揺れた。

「！？」

突然の大振動に、レイルは身をかがめてバランスをとる。足場が揺れているのではなく、神殿自体が揺れていた。縦揺れとも横揺れともつかない、めちゃくちゃな振動だ。

「クソっ！　『神の痕跡』の余波か！？」

神殿を襲う揺れはさらに大きくなり、その場にいるのもままならなくなった。サーシャは近くにあった天使を模した石像の足に必死でしがみつき、なんとか堪えている。レイルもその場に剣を突き刺し、支えにした。

天井からパラパラと白い粉が落ちてきた。このまま揺れ続ければ

神殿自体が持たないかもしれない。以前は大々的に利用されていたため、地方の小さな神殿よりは頑丈なつくりになっているかもしれないが、何分使用されなくなってからずいぶんたっている。崩壊の可能性は捨て切れなかった。

しかし、そのレイルの考えは杞憂に終わり、まもなくして神殿の揺れは収まった。

完全に揺れが収まったのを確認すると、レイルは床に突き刺した剣を抜き取り、腰に納めた。サーシャはいまだに石像の足にしがみつき、目を泳がせている。

「今のは確かに『神の痕跡』の余波だ。つーことは、ここに石盤があんのかよ」

レイルはもう一度室内を見渡す。石盤は『神の痕跡』が出現した建物や土地の主要部分に現れる。カリバローズ神殿の場合、この広間のはずだ。しかしいくら見回しても石盤は見当たらない。縦一メートル、横八〇センチの石盤を隠せるような遮蔽物はこの部屋にはない。しかし先ほどの振動からここに『神の痕跡』が出現したことはほぼ確定した。となれば、石盤が見つからない理由はひとつしかない。

「ここがメインじゃねぇっつーことか」

その意見を踏まえた上で、レイルはもう一度広間を見渡した。中央の祭壇に、それを囲むようにして天使を模した古びた石像が四つ。それ以外目に付くものは何もない。

（どっかに隠し階段みてぇなモンが……？）

大きな神殿になればなるほど、表には出せない、裏の部分というものがある。本当に公表できないものが封印されていたり埋蔵されているのはごく僅かで、たいていは秘密保持目的だ。もう少し近代につくられた神殿ならば空間移動の魔法陣が敷かれていることもあるが、カリバローズ神殿ほど年季の入った神殿の場合は地下につながる通路があるのが定石だ。

「さっきの揺れ、なんだったんです？」

恐る恐るといった調子で立ち上がったサーシャは大きく息をつくと、先ほどの振動が去って安心したのか、脱力したように先ほどまで縋っていた石像に背を預けた。

すると、石像がほんの少しだがズルズルと横滑りを起こした。

それを見たレイルは石像に歩み寄り、体重をかけていたサーシャを片手で突き飛ばすと、思い切り石像を蹴飛ばした。勢いに負けた石像は正方形の台座ごと横倒しに倒れ、そこから地下へと続く階段が姿を現した。

「ハッ。こんなとこにあったのかよ」

「な、何いきなり突き飛ばすんですかぁ！　女の子ですよ女の子！　怪我とかしたらどうするんですか！？」

頬を思い切り膨らませて睨みつけてくるサーシャをレイルは一瞥すると、

「テメェの体重が重いおかげで石像が動いてくれたよ。ありがと

うな」

と、盛大な嫌味を言い放ち、レイルは階段を下り始めた。

「だから、女の子だって言ってるじゃないですかぁ！　それに私の体重はそんなに重くはありません！」

叫びながら、サーシャもレイルに続いて階段を下り始めた。

『神の痕跡』　2

カリバローズ神殿の地下は妙な神聖さで満たされていた。室内は発光能力を持つ石が壁や天井に植え込まれているため、適度な明度を誇っていた。五メートル四方ほどの小さな空間で、その中央には、ひとつの石盤が圧倒的な存在感を放ちながらおかれていた。

「なるほど。これが石盤ってやつか」

レイルは一度大きく唾を飲んだ。柄にもなく緊張しているのが分かる。『神の痕跡』によって出現した石盤を見るのは初めてだった。これほどの、胃を締め付けられるような威圧感を放っているなんて微塵も思わなかった。これが石盤に違いない。確実だ。

石盤の目の前に立ち、レイルはそれを正面から見据えた。いくつもの文字とも絵ともつかない何かが、刻まれている。形自体もまばらで、考古学などの古代言語解釈に詳しい人間に言わせれば均整なのかもしれないが、レイルのような一般人にとっては乱雑に並んでいるようにしか見えなかった。縦読みとも横読みとも、もっと違う読み方をするのかも分からない。確かにこれは神の言語かもしれない。人域を超えたものだ。

「何？　これ？　石盤？　レイルさんはこれを探してたんですか？」

と、そこでサーシャの存在を思い出した。階段を発見した辺りからすっかり忘れていた。石盤の存在を前にしたせいで頭から抜け落

ちていたのかもしれない。しかし、面倒ごとは順番に片付けていくレイルにしては不思議な状態だった。それに石盤は最重要機密事項だ。騎士団でも少数の人間しか『神の痕跡』への調査にはまわされないため、実物を見る人間は少ない。一部隊の長を務めるレイルですら今回が初めてなのだ。そんなものを素性も分からない少女に見られるような真似を許してしまった。レイルは時々適当なところがあるが、面倒ごとは極限まで避けるようにしている。その分だけ剣を振るう機会が減ることを知っているからだ。それなのに今の今までサーシャの存在を忘れてしまっていた。それほど緊張していたということなのだろうか？

レイルは石盤をものめずらしそうに眺めるサーシャを引き剥がそうとしたが、突然の彼女の表情の変化に手を止めてしまった。一瞬にして、少女のあどけない表情が一変し、無表情になったのだ。瞳が異様な光を放ち始め、視線が石盤の文字を追い始める。

「ラグナレク。それは神の生み出した存在にして、唯一神を殺めることのできる存在なり。あるときは剣を、あるときは杖を、あるときは人を形どりそれは万象を司る全にして、究極の個なり」

無表情のまま、サーシャは声を発する。先ほどのような軽い声ではない。重くのしかかってくるような威厳のある声だった。　レイルは思わず息を呑んだ。

「神を殺めし存在は究極の正義にして、最悪の咎人である。かの力を振るいしものは世界を救い、世界を歪める。されど世界はその存在を求め、その存在を疎む」

サーシャは、いや、サーシャという少女だった存在は淡々としゃべり続ける。無表情のまま、一心に石盤を見つめて。まるでそれが

自分の使命だといわんばかりに。

「ラグナレクは全にして一。一にして全。今ここにひとつの力を記し、それを授ける」

突然石盤が激しく発光した。しかしレイルは視線を外す事ができなかった。萎縮してしまったのか。いやそうではない。ほかの、特殊な力に身体の動きを封じられているかのような感覚だった。

極光によって視界は真っ白になる。それでもサーシャの声は絶えず響いた。

「その形は剣。すべてを切り裂く無限の光にして、すべてを無へと返す闇の片鱗なり。救いは滅び、滅びは救い。すべては時の輪廻に飲み込まれ、形を失い意味を失う」

極光で部屋が満たされる。自分がどこにいるのかすらも、たっているのかすらも分からなかった。視界は奪われ、思考もうまく働かない。身体の自由もなく、唯一の残っているのは聴覚だけだ。サーシャの言葉が耳から入り、頭の中で何度も何度反芻される。今まで培ってきた無数の記憶を全て排除してでも脳裏に刻ませるように何度も何度も。

「ラグナレクを手にし者よ。そなたはこれから神の存在を身近に感じることになる。それを受け入れるも拒絶するもそなた次第。世界の巡り会わせと運命の歯車が大きく歪められたそなたの見る世界は紅蓮か。蒼穹か。翡翠か。憤怒か。静寂か。深淵か。それとも、」

サーシャは一度大きくきってから、

「永久なる崩壊か」

さらに極光が激しくなる。全身を稲妻が駆け抜けたような衝撃が走り、直後、レイルの意識は途絶えた。

『神の痕跡』　3

レイルがカリバローズ神殿で倒れているのを彼の部下が発見し、保護されてから一週間が経った。

リノア・フィシリスは王都シルダリアの騎士団本部のとある一室から外を見渡していた。彼女のいる部屋は三階で、王都の町並みが一望できるポイントだった。窓際に置かれた椅子に腰を降ろし、彼女は何を思うわけでもなく、ただ町並みを眺めていた。

レイルが本部の医務室に運ばれてきて一週間。医師によれば外傷もなく、原因は不明だという。一緒に保護された少女はすぐに身元が判明し、両親の元へと届けられた。なぜあの場所にいたのかということは両親にも分からず、彼女が起きてから聞くということでまとまった。彼女もレイル同様に、まだ目を覚ましていないらしい。

「全く。一週間も寝てるんじゃないってーの」

思わず口から漏れてしまったような感じだったが、リノア自身は気付かなかった。

『神の痕跡』。最初はそれがレイルの意識を奪ったものだとばかり思っていた。しかし、その後の調査でそこには『神の痕跡』によって現れる石盤がどこにも見当たらなかったのだ。

レイルが倒れていた地下室はもともと属性水晶という発光とともに様々な力を具現化する水晶の暴発を防ぐために作られたものであ

る、というのが騎士団と、騎士団直属の考古学者及び魔術師たちの見立てらしい。

属性水晶は太陽光に反応して秘められた力を具現化する。地上に出しておく場合、特にカリバローズ神殿のような天井をとっぱらったようなつくりの場合は地下に保管するのが普通なのだ。カリバローズ神殿は属性水晶を用いた特殊な魔法を用いて地域の生活を支えていたそうで、最深部にある四つの天使の石像の下には同様の地下室があり、その四つにそれぞれ火、風、水、雷の属性水晶を設置し、最後に採光能力に長けた室内の使われる水晶を中央にある祭壇に設置し、そこから特殊な魔方陣を用いて四つの地下室に太陽光を運び、水晶の力を具現化、その力をまた魔方陣によって誘導していたらしい。全部聞いた話なので、どこまで真実かは分からないのだが。

つまりは、最深部と、四つの地下室。そこがカリバローズ神殿の重要な部分にあたるわけだが、それらのどこからも石盤が発見されることはなかった。見つかったのは数個の属性水晶ぐらいだ。

なぜレイルは倒れていたのか。その理由は未だ未解決で、その答えを知っているのはレイルと、彼と同時に保護された少女だけなのだ。、

今回の出来事で一番不幸だったのは第一発見者のレイルの部下にあたる青年トリトンかもしれない。大勢の上司にすごい剣幕で詰め寄られ、「もしかしてお前が石盤を盗み出したんじゃないのか」と尋問される羽目になったからだ。しかしそれは結局「トリトンごときがレイルを気絶させるどころか触れることすらできるわけがない」という上の判断によって彼は解放されたわけだが、うれしいような、悲しいような、である。

リノアは眼前に広がる王都の町並みから視線を外し、椅子から腰を上げ、部屋を後にした。向かう先はレイルの眠る医務室だ。もしかしたらもう目覚めているかもしれない。

「目覚めたら、一発殴ってやるんだから」

リノアは拳をギュッと握り、レイルの眠る医務室へと足を進めた。

『神の痕跡』　4

声がした。

始めは会話かと思ったが、そうではない。一定のリズムで刻まれるそれは調べだ。誰かが歌を歌っている。しかしはっきりと聞き取ることはできなかった。

辺りは真っ暗で、何も見えない。目を閉じているのではないかと思い手で触れてみるが、そうではないようだ。右も左も前も後ろも見えない状況にレイルは歯噛みする。無意識のうちに腰に手が伸びていた。

しかし、そこにはあるはずの剣がなかった。大きく舌打ちをする。剣がなかったということよりも、何も見えない恐怖に武器を求めた自分の弱さにだ。

何も見えない上に肌寒かった。ようやく思考が回り始める。最初に浮かんだ疑問は、

「ここは、どこだ?」

頭の中で、今に至るまでの状況を反芻する。ハッと、思わず頭を上げた。カリバローズ神殿でおきた出来事が再び頭の中で再現さえた。

そしてとある単語が口に出る。

「……ラグナレク」

言葉にした瞬間、一瞬にして辺りを覆っていた闇が消え、代わりに一面に何かが浮かんだ。

そう、何かだ。輪郭を伴わないそれをレイルは何か判断ができない。認識ができないのだ。

視線の先に、一人の人間がたっているのが見えた。顔までは判別できず、体格からも男性なのか女性なのかも判別できない。そこにいた人間はじっとレイルを見つめている。

今度は手に違和感が走った。気づけば、右手に剣が握られている。いつも使っている手になじんだ機甲剣（アーマーブレード）ではない。異様な形をした剣だ。機甲剣（アーマーブレード）の類であるかどうかも怪しい。しかし、初めて見た気がしなかった。いや、実際見たのも持ったのも初めてなのだが、なぜか、懐かしいような、そんな衝動に駆られていた。

しばらく手にした剣を眺めていると、次第にそれは花びらのように散り散りになり、手から零れ落ちて、輪郭のない世界に取り込まれていってしまった。

ふと視線を上げる。先ほどと同じところに、人影はあった。微笑んでいるように見える。近づこうと足を進めても、一向に距離は縮まらない。あれは幻影なのだろうか？

確かめるすべもない。どうすることもできず、ただただレイルはそこに立ち竦んでいた。

「レイル！　レイルってば！」

自分の名前を叫ばれ、レイルは勢いよく上半身を起こした。目の前にはリノアがいた。心配そうな顔でレイルを見つめている。

「大丈夫なの？　すごい汗よ？」

そういわれて、自分が大量の汗をかいていることに気づいた。服が肌に張り付いている。

「リノア、か」

「アンタ一週間も寝てたのよ？　いったい何がったの？」

「一週間？」

「……覚えてないの？　アンタはカリバローズ神殿で意識を失ってるのが発見されて、医務室に運ばれてから一週間も寝てたのよ？」

レイルはぐるりと室内を見渡す。確かに騎士団本部の医務室だ。大勢を一気に手当てできるように十個以上ものベッドだ並べられている。奥には包帯や薬品から、治癒関連の水晶が置かれた棚があった。

「一体全体、何があったのよ？」

レイルはすべてを鮮明に記憶していた。しかし、あれが現実だっ

たとは思えない。それにあの少女。石盤の文字を読んだのだろうか？　それに先ほどまで見ていたはずの夢。それだけはうまく思い出せなかった。浮かんではすぐに消えてしまう。雲を掴むような感覚だ。

リノアが心配そうな目を向けていることに気づき、レイルは口を開く。

「何でもねぇよ」

「何でもないわけないでしょ。一週間よ一週間。これだけ眠っておいて、なんでもないってことはないでしょ？」

正直、レイルは悩んだ。あのときのことを、『ラグナレク』についてのことをリノアに話すべきか。『ラグナレク』なんて言葉あの時まで聞いたことはなかった。それはきっとリノアも同じだろう。多分彼女ならそんな突飛な話でも信じてはくれるかもしれない。お互い毎日悪態を付き合うような関係だが、信頼はしているのだ。

「何も覚えてねぇんだよ。気づいたらここにいた、って感じだ」

だからこそ、リノアには嘘をついた。まだ伝えるべきではないと、全貌がつかめておらず、危険を伴う可能性のある話に彼女を巻き込まないためにも、だ。

リノアはさらに心配そうな顔を浮かべた。それに対し、レイルは薄く笑いがら答える。

「別にただ記憶が抜け落ちてるだけじゃねぇの？　そんな心配することでもねぇだろ。それにお前にもそんな顔ができんのな。意外

だぜ」

リノアは一度顔を伏せ、それから何かを呟いたが、レイルには聞こえなかった。

「起きたか、レイル」

そう声をかけ、医務室に入ってきたのは十二番隊隊長ローグス・マクスノアだった。熊のような大柄な男で、背丈は騎士団の中でも一番だ。縦にも横にもでかいローグスはレイルのベッドの横に立つと、顔一杯に笑みを浮かべてレイルの背中をバシバシ叩いた。

「やっと起きたかレイル！　心配させやがって！　リノアなんか一晩中泣いてたんだぜ？」

「ちょ……っ！　ローグスさん！　それは言わないって約束だったじゃないですか！」

リノアは顔を耳まで真っ赤に染め、レイルから顔を背けた。レイルもどう反応していいのか分からず、とりあえず苦笑いを浮かべる。

「それで、だ。起きて早々悪いんだが、上は何故お前があそこに倒れていたのかを知りたがってる。何せ『神の痕跡』目撃情報があった場所での出来事だからな。気にならないほうがおかしいってわけだ」

ローグスは髭の生えた顎を触りながら、ベッドで上半身だけを起こしたレイルを見下ろす。

「それで、何があったんだ？」

「レイルは何も覚えていないそうです」

レイルが口を開く前に、リノアが話し始めた。それに続けるような形でレイルも言葉を紡ぐ。

「調査に行って、最深部に何もなかったんで地下じゃねぇのかと思って地下室へ続く階段を見つけてからの記憶がないんすよ。気づいたらここにいたって感じで」

ほぉ、とローグスは漏らし、何やら思案しているようなそぶりを取った。

「あそこは属性水晶を使ってた神殿だから、長らく保管された水晶の力で室内が満たされていたのかもな。よくある話ではある。ものによっては長い間充満した魔力は幻覚作用も伴うようだし、それが原因で一部の記憶が飛んだってのもありえなくもない話だ。よし、とりあえず上にはそう伝えておこう。まだ何回か質問にあうかもしれないが、それもとりあえず答えてやってくれ」

ローグスは踵を返し、大きな身体を揺らしながら医務室を後にした。残ったのはレイルと、未だに顔を真っ赤にしたリノアだけだ。

しばらく沈黙が医務室を満たした。気まずい雰囲気が漂う。レイルは身体からいやな感じの汗が出るのを感じ、それから逃れるように何とか話題を見つけようとするがうまくいかない。

そんな時、助け舟を出してくれるかのように、放送が室内に響き渡った。

『第七部隊に告ぐ。仕事だ。直ちに集合してくれ』

ハッとリノアは顔を上げる。彼女は第七部隊の副隊長だ。

「あたし、行ってくるから！　ちゃんと寝てなさいよ！」

矢継ぎ早にそう言い放つと、リノアは逃げるように医務室から飛び出していった。

残されたレイルは先ほどのローグスの言葉を思い出す。

「水晶の力の影響による幻覚作用、か」

あの映像は幻覚だったのか。サーシャとは何者だったのか？　まさかあれも幻覚だったのだろうか。

サーシャ・ラリオンもレイルと一緒に保護され、今は彼女の実家にいることをレイルは聞かされていなかった。

その時、強烈な爆発音が耳を劈いた。王都の東側のほうからのものである。

レイルはすばやくベッドから飛び降り、窓から王都の方向を見た。黒煙が空を満たそうとしている。かなり大規模な爆発だ。あの位置からして……、

「魔鉱炉か！？」

壁に立てかけられていた自身の機甲剣（アーマーブレード）を手に取り、レイルは医務室を飛び出した。

『神の痕跡』　5

王都を襲った強烈な爆発の一時間前、赤色のローブに身を包んだトニクは王都のメインストリートを歩いていた。左右にはさまざまな店が広がっていて、人通りも多い。

トニクは真っ直ぐ騎士団本部を目指していた。ある男に会うためだ。

腰にくくりつけた二本の機甲剣（アーマーブレード）はこの日のために調整した。自分の作品の中でもこれ以上はない、現状の最高傑作だ。

機甲剣（アーマーブレード）は特殊な長方形のメモリースティック――通称『ギア』を用いることで様々な効力を発揮する。重力操作系のギアを使用すれば機甲剣（アーマーブレード）自体の重量を自在に操れるため、機甲剣（アーマーブレード）士の男女比率は半々である。機甲剣（アーマーブレード）によってギアのスロット数は違い、カスタマイズで最高六つまで増やすことが可能である。しかしギアの起動には機甲剣（アーマーブレード）の電力供給を必須とするため、電力がなくなってしまってはいくらギアが沢山あっても意味を成さない。その上ギアは大抵のものが起動と同時に待機電力を消費するため、複数個を同時使用するにはかなりのスキルが必要になってくるのだ。

トニクはそれらを考慮し、対レイル戦に向けて最高のギア構成を考えてきたのだった。

思わず笑みを浮かべる。またレイルと剣を交えることができると思うと武者震いがとまらない。レイルは数少ない自分と同じ人間だ、

とトニクは思っている。。レイルは強敵と戦うためだけに騎士団に入った。そしてトニクは、そのレイルを、レイル・クラムルージュを倒すためだけに剣を鍛えているのだ。

「今度こそぶっ倒してやる」

そのとき、一人の少女が目の前をよぎった。銀髪に、金と蒼のオッドアイの少女だった。目鼻筋が通っていて、人形のようなかわいらしさを持っていた。肌は白亜のようで、一度も日の光にあたったことがないのではないかと見るものを惑わすほどだった。

トニクは無意識のうちに少女を目で追っていた。メインストリートを横切り、少女はわき道へと消えていく。確かあの先には魔鉱路が合ったはずだ。王都の住民の生活を支える基盤だ。そんなところに何か用でもあるのだろうか？

気にはなったが、あとをつけるほどでもないだろう。トニクは止めていた足を再び動かし、騎士団本部へと向かった。

『神の痕跡』　6

ダリス・ザン・バリクロワは王都を一望できる丘の山頂にいた。大きな樹木に背を預けている。

「もう少しで崩壊が始まる。今回のラグナレクはどう対処するのかな？　なあココ、君はどう思うんだい？」

ココ、と呼ばれた少女はダリスの隣で小さく丸まるようにして座っていた。その目はどこか空ろで、視線は王都を見ているが、まるで別のものを見ているかのような怪しげな光を放っていた。

「多分、助ける」

「へぇ。彼が助けるのか」

「違う。鍵が助ける」

「鍵がかい？　あは。それは面白い展開だ。そうか、鍵が介入してくるのか」

ダリスは声に出して笑う。ココは無表情のままだ。

「さぁ。じきに宴が始まるよ。新たなる仲間の誕生だ」

『神の痕跡』　7

レイルが魔鉱炉に駆けつけたときにはすでに大きな人だかりができていた。それを掻き分けるようにしてレイルは魔鉱炉へと進んでいく。

その先で見たものは一人の少女だった。髪の毛をツインテールにし、ピンク色のワンピースを着ている、人形のような少女だ。まだ十歳くらいだろうか。そんな少女が、なぜこんな、爆発現場で泣いているのかが理解できない。力なくうつむいた少女のそばにはリノアがいた。どうやらなだめているようである。そちらは彼女に任せておけばいいだろう。子供をあやすのは女性のほうがいい。

レイルは魔鉱炉を見上げた。高さ二〇メートルにもなるそれのちょうど中腹部分が消し飛んでいた。魔鉱炉はいくつもの水晶と複雑な魔方陣を用いて安定を保っている。そのシステムによって魔鉱炉は近隣に漂う精霊の力を一度集め、それを王都中の家庭に振り分けているのだ。振り分けた力は各家庭に設置された発光水晶や属性水晶に干渉し、そこに秘められた力を引き出している。そうすることによって各家庭は使いたいときに使いたいだけの水晶の力を引き出すことができるのである。

今回の事故はどうやら魔鉱炉に取り付けられた精霊の力を集約するための水晶のひとつに大きな負荷が掛かってしまったようだ。許容量を超えた水晶が暴発したため、今回の事故が起きたのだ。

幸いにも魔鉱炉の自動防御障壁装置が正常に働いたようで、周囲

に被害は出ていなかった。魔鉱炉の一部が原形をとどめていないほど激しく吹き飛んだだけである。今回の事故を想定してとりつけられた防御障壁様々である。

「レイルさん！」

名前を呼ばれ、振り返るとそこには部下のトリトンがいた。黒の短髪に、丸顔の青年だ。歳はレイルのひとつ下で、入隊したのも同様である。

「目を覚ましたんですね。無事で何よりです。いったいあそこで何があったんですか？」

トリトンはカリバローズ神殿で気を失っていたレイルの第一発見者だ。普通ならここでお礼のひとつでもするべきなのだが、そのことを聞かされていないレイルは淡々と答える。

「今はそのことよりも目の前のことだろうが。被害は？」

「住民に被害はないそうです。魔鉱炉も一週間もすれば修復が可能かと。予備の水晶を使って新たな回路を作れば今までどおりの運行は可能とのことです」

「そうか」

「それにしても、なんでこんなことが起きたんですかね？」

トリトンの言うことにレイルは眉をひそめる。

「そもそも魔鉱炉の水晶が暴発するなんておかしいですよ」

「あん？　そんな珍しいことでもねぇだろうが」

「いえ。今回のは違うんです。今までに起きた魔鉱炉の暴発はちょうど大精霊の周期に関係しているんです。大精霊は一体で普通の精霊の何百万以上の力を有しているわけですから、魔鉱炉のバランスが崩れてしまうのは仕方のないことなんです。ですが今回は」

「大精霊の周期から外れてるってわけか」

「そうです。だから妙なんですよ」

そうなると、考えられる原因は外部からの干渉だ。帝国が何かをしてきた、というのは考えにくい。王国と帝国は犬猿の仲だったが、今代の王になってからは友好協定が結ばれている。たとえそれが表向きだったのだとしても、それを破ることが外交上にどのような影響を及ぼすのか理解できないわけではないだろう。

（帝国からの干渉ではないか。だったらなんだってんだ。魔鉱炉が暴発するってことは、精霊か、もしくはそれと同等の力の量または質の変化があったってことだよな）

レイルは黙り込み、思考をめぐらす。しかしレイルはもともと騎士であり、魔術のほうに関しては疎い。過去の事例などは騎士団の命令で一通り目を通したが、専門的な知識になると文字通り専門外だ。

「今回の事故の一番の被害者はあの子かもしれませんね」

レイルは意識を内側から外側に戻し、トリトンの視線の先を追う。

そこにはリノアと、あの少女がいた。

「住民の話によれば、爆発のときあの子が一番近くにいたらしいですよ」

レイルは身をかがめたリノアに抱きついて泣いている少女をまじまじと見つめた。

（あの子が今回の事故の原因……なわけないか）

レイルは首に手を当てて関節を鳴らし、踵を返した。

「あとは専門の人間が何とかしてくれんだろ。本部に戻るぞ」

「そういえばレイルさん、もう歩き回ったりしていいんですか？」

「一週間も寝てたんだろ？　これ以上仕事しなかったらそれこそクビだっつうの」

レイルは歩きながら、今回の事故のことを頭の中で反芻していた。

（どうもきな臭ぇ。本当にただの事故なのか？）

はっきりとは判断できないが、嫌な予感が脳裏を過ぎる。

しかし、それが何なのか、今のレイルには見当もつかなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8898z/

無法のガジェット

2011年12月28日00時01分発行